
かむばっく！記憶～魔法を添えて～

沌弩羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かむばつく！記憶　～魔法を添えて～

【Nコード】

N5223Z

【作者名】

沌弩羅

【あらすじ】

記憶を残したまま転生してきた二人は、記憶を取り戻すために魔王を倒しに行く。

その途中に待ち受ける強敵の数々、そして夢の世界と現実世界が…
ちなみに、料理名みたいなタイトルですが、料理関係では一切ございません。

魔法関連集『本文後に読むのがお薦め』

『クリティカルボルトレンジ・マジック
絶雷』 強呪文 MP消費5

『オーバーブレイク パワーポイント ノーマル・マジック
上限破壊【力型】』 普通呪文 MP消費3

『ブレイクチャックル ノーマル・マジック
崩壊拳』 普通呪文 MP消費2

『ブレイク・エフェクト アンダー・マジック
効果消去』 弱呪文 MP消費2

これ以降にも本編で登場していった呪文は、本編で登場してから、
ここに乘せたいと思っていますのでよろしくお願いいたします。

魔法関連集『本文後に読むのがお薦め』（後書き）

MPの消費計算などが合わない場合があったら教えてください。

s t o r y 1 〽 現実世界 〽 (前書き)

文章が下手ですので読みづらいたと思いますがよろしくお願いします。

story 1 ～現実世界～

ここは、マジックゲロウスワールド魔法発展世界セインクル

俺は、サカモトユウシ阪元勇志。高校1年生。この世界では、小魔法学校、中魔法学校、高魔法学校、魔法学校の四つの学校があり、それぞれ小学校、中学校、高校、魔校と呼ばれている。

「あゝ疲れたねえ、勇志い！あ、そういえば今日出た宿題なんだけどさあ………」

隣でしゃべってるのは、マガリレンコ真狩蓮子。幼馴染の関係だ。なぜだか語尾が延びる癖がある。

「ねえ、私の話聞いてるう？さっきからぶつぶつなに言ってるの？」

頭の中で設定を読者に話していたはずがいつの間にか口に出していったらしい。

「またなんか言ってるよお。設定とか読者とかあ……あ、もしかして説明してたでしょお！そうゆうのは、作者の人がなんとかしてくれるんだから、私たちは気にしないでいいんだよお。あ！作者とかいちやったあ！」

結構間抜けだな……ま、そういうところがまたかわいいんだけどな。それじゃ、ここからの説明は蓮子の言ったとおり作者に任せよう。

『この世界は魔法つまり、道具をなにも使わずに火をおこしたりす

ることなどの魔法が発達している世界だ。
そもそも魔法とは、魔法の難しさや魔法体力によってランクを分けられており、マジックポイント
ワースト・マジック アンダー・マジック マル・マジック ストレンジ・マジョク パワー・マ
ジック ビレボウ・マジック 文、禁止呪文に分けられている。
禁止呪文を使った場合、即行で地獄監獄行きとなる。ヘル プリズン

俺は今、蓮子と下校中だ。

「ねえねえ勇志い。今日わかったことあったあ？」

「いや、やっぱ思い出せね。おまえのほうはどうなんだ？」

「私のほうもダメえ。やっぱり私たちが前世でも知り合ってたってことしかわかんないよお。」

俺たちはこの世界でも1000人に1、2人の前世記憶保持者だ。ゼンセキオクホジヤ

しかも知り合ってたんだから驚きだ。

「んゝ、やっぱあいつに聞くしかねーか。」

「そうだねゝゝ、しかたないよねえ。」

ん？あいつは誰かって？

それは……

To be continue . . .

s t o r y 1 〽現実世界〽（後書き）

誤字脱字等ございましたら教えてください。
これから新連載始めます。

投稿遅いので気長に待ってください。

story 2 現実世界

ん？あいつは誰かって？

それは……………

俺たちと同じ前世記憶保持者の、ゼンセキオクホジンヤ漆原賢だ。ウルシハラケン

こいつは俺たちと同じ高校一年だ。しかしこいつの頭脳の良さと魔法体力は通常ではありえないくらいの高さを誇っている。マジックパワー

だから現在、転生について研究しているこいつに聞けばわかるかもしれないということだ。

ま、今までに何回も聞いてるけどな……

「おい、いるかー。」

「いますかあー。」

少ししてから返事があつた。

「……ふあーい、だれですか、新聞ならいらないますよ。」
「どうやら寝ていたらしい。」

「俺だよ、お・れ！阪元だよ！」

「そしてこつちはあ、蓮子だよ。」

「あゝ久しぶり、勇志に蓮ちゃん、今日はどうしたの？」
「いつもこのくんだりから会話は始まる。」

「ここに来たら決まってるだろう、前世の記憶についてだよ。」

「あゝ、またそれについてか。じつは一つかなり重要な情報が手に入ったんだよ。聞きたい？」

「聞きたいよあ。」

「俺も同じく。」

「じゃあ、一度だけ言うよ。結構秘密なことだからね。じつはここ
エギラス城下町の北のほうにカガラス城があるだろ、そこに転生指
輪^{リング}についての古文書が置いてあったらしいんだ。

しかし、それが何者かに盗まれたらしいんだ。」

「それって誰だったのお？」

「まあ落ち着いて聞いてくれよ。それはだいたいい見当がついてるん
だ。それは、坂寄^{サカザキ}怜生^{レオ}。こいつも前世記憶保持者だ。さらに最近で
は、最強呪文の魔族転身で魔王を目指しているらしいんだ。すでに
世界のあちこちに魔物をばらまいているらしい。だから勇志、世界
を旅してこいつから古文書を取り返してくれないか？」

「わかった。蓮子はここで待ってる。すぐ戻ってくる。」

「えっ？私も行くよお。」

「やめときなよ、蓮ちゃん。あぶないよ。そもそも蓮ちゃんは攻撃
呪文が使えないんだよ。危ないよ。」

「でもお、回復呪文なら使えるよお。だから…グスン……連れてつ
てよお。」

「わかったよ。俺は、回復呪文が使えない。だから助けてくれるか
？」

「うん！私頑張るよお！じゃあ明日、早速カガラス城に行こう。と
りあえず、今日家に帰って準備をして、明日朝七時に時計台の前で
いいか？」

「うん。じゃあまた明日。」

こうして俺は、蓮子とともに旅に出ることになった。

To be continue...

s t o r y 2 〱 現実世界〱 (後書き)

第二話投稿しました。

誤字脱字報告等ございましたらよろしくお願いします。

story 3 現実世界

俺たちは今からカガラス王に会いに行くところだ。

「勇志い。カガラス王ってどんな感じかなあ？」

「んー。俺の予想だとフツーに髭がはえてて、王冠かぶってる感じ？」

「ああーわかるかもあ。」

そんな感じの話をしながら城へと入ろうとすると、門の前に立っている兵士に止められた。

「おい、その若者たちよ。止まれい。」

「えっ？」

「城への入城理由を述べよ。」

「勇志い。どうしよう…」

「俺に任せる。兵士さん。俺たちは前世記憶保持者です。それでこの城には転生指輪リバース・リングの古文書があったと聞きました。それについて聞かせてもらおうと思って、やってきました。」

「理由は分かった。しかし近ごろは物騒な世の中になり、王の命を狙うものが増えてきているのだ。もちろんそなたたちを、信じていないわけではない。しかし念のためと思って、行おこなってほしいことがある。」

「それはなんですか？」

「ここから東に行ったところに、魔性の森がある。その最奥に祠がある。そのなかに前世記憶保持者にしか触れることのできないつるぎが、置いてある。それを持ってきてもらおう。」

「それを持ってくれば、王に会わせてくれるんですか？」

「もちろんだ。」

「蓮子。聞いたか？明日にその森に行くぞ。」

「うん！わかったあ。」

俺たちは、歩き出そうとしたとき兵士に呼び止められた。

「待て。一つ忠告がある。魔性の森には魔物が出る。倒すには呪文はもちろん、武器も必要だ。
そこで二人に武器を授ける。ほれ、男のほうにはこれを、女のほうにはこれだ。」

俺は鉄製の剣を、蓮子には櫛の木でできた杖をくれた。

「健闘を祈るぞ！」

「「はい！」」

俺たちはとりあえず、宿へ向かった。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

「二人です（う）」「」

「ふふ、仲のいいこと。どうしますか？一人一部屋にしますか？それとも二人一部屋にしますか？」

「どっちがいい？」

「どっちでもいいよお。」

「それじゃあ二人一部屋で。そっちのほうが安いですよね？」

「はい。では、部屋へ案内しますね。部屋番号は【201】号室です。」

次の日

「おい、蓮子、蓮子起きろ。」

「……んん。……おはよう。」

「おはよう。今日は魔性の森に行く日だぞ。」

「うん。」

俺たちは、手早く準備して森へ向かった。

阪元勇志LV1

HP 32

MP 16

力 10 + 5 (鉄のつるぎ)

防 10 + 3 (平民の服)

真狩蓮子LV1

HP 24

MP 24

力 5 + 3 (櫓の杖)

防 5 + 3 (平民の服)

To be continue . . .

s t o r y 3 〽 現実世界 〽 (後書き)

三話、書き終わりました。

最後のパラメーターみたいなやつは今のところは特に何も考えてないのでおまけだと思ってください。

story 4
〜 現実世界 〜

俺たちは、今魔性の森にいる。

もうこの森に入ってから二日たった。しかしいまだに祠は見つかからない。

「勇志い。休憩しないい？」

「そうだな。俺もちょうど脚がつかなくなってきたところだ。」

そう言つて二人は川のそばにあつた、岩に腰掛け、リュックから乾パンと干し肉を取り出した。

「最初のほうは、珍しい味でうまかったけど飽きてきたな……」

「うん、そうだねえ。」

俺たちは、そんな話をしていると、川のほうからなにかが近付いてきた。

「ん？何かが近付いてきたぞ！」

「ああ！ホントだあ！」

俺たちは武器を構えた。

「グガアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

そんな叫び声とともに、魔物が現れた！

「ん？どこかで見たことがあるぞ？」

「そうだ。あの魚のような顔、強靱な肉体、そして、ゆづは船一隻を
超えるであろうその巨体、そうだ！」

ゴッディー 傘メラ

フィッシュマン

【神喰合成獣】魚人兵だ！たしか、授業でやったぞ！いや、そんなことを考えている暇はない！

モンスターランク

たしかあいつの魔物階級はCランク、ふつうここには住んでいるはずのない魔物だ。

それがこんなところにいるとは……どうなっているんだ。

しかし、倒すしかない！

俺は、精神を集中させ呪文を唱えた。

クリティカルボルト
絶雷！

フィッシュマン

.....

やっ
たか？

しかし相手は、大ダメージどころか傷一つ付いてない。

「勇志い、あいつの弱点は目だよお!!!」

「つてくれ！」

「え？でもあれをつかったら……」

「いしから早く！あわかなしと勝てなした！」

「……分かった。いくよ……」
 「上限破壊【力型】」
 「!!!!!!」

しかしこの呪文には一つ弱点がある。それは……

守備がゼロになってしまふのだ。

つまり【攻撃を当てたほうが勝ち】なのだ。

魚人兵士

「あゝ~~~~~!!!!!!」

「蓮子っ！！！！！！！！！！」

アアアアア！！！！！！！！！！

阪元勇志LV1

HP 32

MP 11

『特殊』 オーバーブレイク 上限破壊【力型】 パワーポイント 効果により +5 (鉄のつるぎ)

『特殊』 オーバーブレイク 上限破壊【力型】 パワーポイント 効果により 0 + 3 (平民の服)

真狩蓮子LV1

HP 24

MP 21

力 5 + 3 (櫂の杖)

防 5 + 3 (平民の服)

To be continue . . .

s t o r y 4 　　ゝ現実世界ゝ（後書き）

初めての戦闘描写でした。ふう（^^）
次回で闘いを終わらせるつもりです。

「ヤベッ！」

俺はとつさに回避しようとした。が、それはとてつもない太さだった。まさかこれが魚人兵族 最狂の技、魚人壊滅砲だというのか！ 幸い俺は、かするだけで済んだが、ぶち当たってたらどうなっていたのか考えるのも恐ろしい。

「ふっ．．．さすがに初戦闘でこいつを倒すのは無理か？だが俺は、やらなくちゃ．．．いけねー．．．．．んだよオオオオオオオオオ！」

そして俺は、蓮子にある指示を出した。

「おれに、俺にもう一度、
『オーバーブレイク 上限破壊 パワーポイント【力型】』
を唱えてくれっ……！！」

「え、でもそんなことしたら勇志があ……」

「いいからやってくれ！！！！！」

「……分かった、でも一つだけ。効果時間は5秒、それいじょうやるとお、体が粉々になっちゃう。」

「大丈夫だ。2秒以内に殺してやるよ……!」

「うん。いくよお!!!」
『上限破壊【力型】』
「!!!」

俺は、今までに感じたことがないすさまじい力を手に入れた。しかし、風が痛い。風が吹く度に全身に、激痛がはしる。正直、三秒持たないかもしれない・・・ここで決めてやる・・・

やつはまた魔力をため、呪文を唱えようとした。

「死ぬー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

!!!!!!

俺は渾身の力で、あいつを殴り飛ばした。

デューゴオオオオオオオオオオ

.....! ! : ! ! ! ! ! ! !

凄まじい風切り音とともに、やつは吹っ飛び粉々に砕け散った。

「勇ましい！ やったねえ！ あ、忘れてたあ。『効果消去』！！！！……」

よし、これで効果は切れたよ。」

「そ…そうか……………」

「勇志い。勇志い…」

蓮子の声が遠ざかっていく…………そして俺はそのまま気を失ってしまった…………

阪元勇志LV1

HP08

MP09

力10+05（鉄のつるぎ）

防10+03（平民の服）

真狩蓮子LV1

HP24

MP16

力05+03（櫂の杖）

防05+03（平民の服）

To be continue…

s t o r y 5 〽現実世界〽 (後書き)

やっと、戦闘が終わりました。

次回は祠の前に行くところです。

誤字脱字ありましたらお願いします。

story 6 夢世界

俺は不思議なところにいた。
見たこともない場所だった。先が見えない野原。水平線。山々。
とてもきれいな場所だった。まるで……

そう、まるで…

RPGの様な世界だ。向こうのほうには大きなお城まである。

「ん！？ここは…どこだ…」

俺はとりあえず城のほうまで歩いてみることにした。

ああ、のどが渴いた…

城まで行ったら休憩しよう…

そして、歩き始めてから20分ほどだった。

「ついた〜。」

俺は宿へと向かった。

「すいませーん。」

少ししてあわてておくから走ってきた。

「お待たせしました。おひとり様ですね。あれむあ、珍しい服ですね。異国のものですか？」

俺は自分の服とこの人の服を見比べてみた。

俺は黒いパーカーにジーパン、それに比べてこの人は珍しい何とも言えない服を着ている。紫や赤がしま状に縦に縫われていた。

「ま、まあそんなところです。」

「あ、お部屋はこちらです。」

俺は、部屋に案内された。そしてここまでの事を振り返った。

冷静に考えたら、おかしい。

俺は確か、フィッシュマン魚人兵を倒したんだ…

その後…そうだ！気絶したんだ。

そしたら突然こんなところに…どうなってんだ…

ま、考えても仕方ない。とりあえずゆっくり休んで手掛かりを探そう…

チュン……チュンチュン

「ん、ん。朝か…」

そうか、ここは前にいた世界とは違うところだったんだ。そういえばここはどこだろう。

とりあえず昨日の係りの人に聞いてみよ。

「すいません。ここはなんていうお城ですか？」

「へ？ああ、ここはエギラス城ですよ。」

「エギラス城……」

……それって俺の故郷じゃねーか！

「もしかして、北のほうにカガラス城というお城がありますか？」

「えーっと、たしかカガラス城は、南東の方角ですよ。」

違う…俺がもともといた世界とは、地形が違うようだ…

「ありがとうございます。とりあえずカガラス城に行ってみたいと思います。」

「いや、それはやめといたほうがいいよ、今あの城には悪魔が住み着いてるって噂だ。勇者でも来ない限りどうにもできない。」

「そうですか。わかりました。」

「じゃあね。良い旅を。」

悪魔：？誰なんだろう…？

まあいい。行ってみるしかないんだから。

すっかり、夜も更けてきたな。とりあえず今日はここで野宿でもするか。

そうして俺は、夢の中へと落ちて行っただ。

そして夢を見た…

『あなたは、いま、とても混乱しています。しかしいずれすべてがわかる時が来るでしょう。それまで、どうか…生きていてください。あなたはとても大切な人です。どうか…どうか………』
不思議な夢だ…とても美しい女の人語りかけてきた。

そして目覚めた…

T o b e c o n t i n u e . . .

s t o r y 6 〽夢世界〽 (後書き)

投稿遅くなりました。

次回は、今度こそ祠に行きます。

story 現実世界

「勇志いゝ、勇志いゝ！」

ん、この声は・・・

目を開けたら蓮子が俺のことを見下ろしている。

「…ん。俺は野宿してたんじゃないかなったっけか？」

「へ？なに言ってるのぉ？ここはカガラス城下町の宿だよぉ。」

帰ってきた…のか？

「もう、三日も寝てたんだよぉ。大丈夫う？」

「あ、ああ。ちよつと変な夢を見てたところだ。それより俺をどうやって宿まで連れてきたんだ？おまえひとりじゃ俺を運ぶのは無理だろ？」

「それがねえ。どこからか女の人が出てきてその人が呪文を使ったらここまで来たんだぁ。」

その呪文がねえ。聞いたこともないような呪文でねえ、たしかぁ…『ジャンなんとか』っていったかなぁ。」

「そうか…。明日、もう一度森に行つて、つるぎを取りに行こう。」

「うん。」

「勇志起きてえゝ。朝だよぉ。」

「ああ。じゃあ行こうか。」

小悪魔^{ビルル}や液体生物^{アメバー}が出てきたがあの魚人兵^{フィッシュマン}を倒した俺たちにとっては、弱い敵だった。レベルを上げるには最適だった。

俺たちはそれぞれ3レベルまであがった。新しい魔法も覚えた。まあ、それは今度でいいだろう。

そうして俺たちは祠までたどり着いた。

「勇志い。これが祠かな？」

目の前の看板には『コノサキホコラ。ヒキカエスナラ、イマ。』と書かれていた。

「そうだろう。それより『ヒキカエスナラ、イマ。』ってどういうことだろう？」

「そのまんまの意味だよ。帰るなら今って教えてくれてるんだよ。お。」

「そんなのはわーってるよ！！！！そうじゃなくて、ここまで来て帰るやつはフツーいねーだろ？」

「確かにい。」

「なのここに立ててあるってことは祠に何かあるんだよ。」

「なるほど！」

「だから気をつけていこうな。」

「うん！」

タッタッタッタッタ

「うわあああああ！」

……

「落ちた…」

蓮子は穴に落ちた。だから言ったのに…

「おーーーーーい、れんこおおおお。だいじょぶかああああ！」
しばらくして返事が返ってきた。

「勇志いいいい！この先に道があるよおおおおお！」
「今行くからそこから動くなよおおおおお！」

だいじょぶそうでよかった…

俺はその穴に下りて行った……

阪元勇志LV03

HP40

MP20

力12+05（鉄のつるぎ）

防12+03（平民の服）

真狩蓮子LV03

HP28

MP30

力08+03（櫂の杖）

防08+03（平民の服）

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

s t o r y 〽 現実世界 〽 (後書き)

投稿できるときにいつきにしたいとおもいます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5223z/>

かむばっく！記憶～魔法を添えて～

2012年1月12日23時09分発行